

世界の図書館 アメリカ編

1 パリ万国博覧会と報告書 1855-1937-西南学院大学図書館蔵書を中心に

「第1回 1855年パリ万博&1867年パリ万博」

図書館長 後藤 新治

2 ブックレビュー

「Dead poets society : a novel」 学長 神学部 神学科 教授 G.W.バークレー

「きみたちと現代」 学生部長 商学部 商学科 教授 福浦 幾巳

「マルセルの夏」 文学部 外国語学科 フランス語専攻 4年 園田 桜子

「図書館愛書家の楽園」 法学部 国際関係法学科 4年 内田 義久

「苦海浄土」 法学部 法律学科 3年 岡 麻美

「消費社会の神話と構造」 文学部 英文学科 3年 笠 優弥

3-5 世界の図書館 アメリカ編

ローズンフェルト図書館 商学部 経営学科 准教授 鄭 義哲

セシル・H・グリーン図書館 文学部 英文学科 教授 田部井 孝次

ボストン大学図書館 法学部 法律学科 准教授 田中 慎一

6 図書館利用説明会

図書情報課 小川ゆきえ

7 蔵書ギャラリー no.15

『資生堂(コレクション・モダン都市文化17)』

国際文化学部 国際文化学科 准教授 西村 将洋

図書館報

SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2013. April No.174



パリ万国博覧会と報告書

1855-1937

— 西南学院大学図書館蔵書を中心に —

第1回 1855年パリ万博&1867年パリ万博

図書館長 後藤 新治

4月1日付けで図書館長に就任した後藤新治です。よろしくお願いたします。3期目(1期=2年)4年ぶりの復帰となります。前任中は増築図書館(約14,400平米180万冊収容、うち自動化書庫840平米80万冊収容)を含むメディア棟が完成目前でしたが、

思わぬ事態に遭遇し実現には至りませんでした。奇しくも再び新図書館建設に巡り合わせ、百年とは言わないまでも「五十年の計」を念頭に、決意を新たにしているところです。

さて図書館報、前回の拙稿「美術家と本」シリーズを受け、今回は標記タイトルで図書館蔵書を中心に、パリ万国博覧会とその報告書を取り上げてみました。ユートピア思想とその表象研究がきっかけで、実現されたユートピア=疑似ユートピアとしての万国博覧会の研究に手を広げ、機会を捉えては関係書を購入して来た結果、現時点でオリジナルのパリ万博報告書類が18件26冊集まりました。そこで1855年から1937年まで都合8回開催されたパリ万博をこれから4回に分け順に紹介していく予定です。第1回はロンドン万博に先を越されたナポレオン3世が急遽開幕した1855年の最初のパリ万博と、サン=シモン主義の理念が展示空間システムとして見事に結実した1867年の2度目のパリ万博。

最初に紹介する1855年の第1回パリ万博(fig.1&2)の公式報告書[参考文献1](fig.5)の構成はさながら百科全書を思わせる壮大なものです。まず冒頭で関連政令をまとめ、続いてあらゆる産業界を鉱業から美術に至る8グループ31クラスに分類、さらに各クラスは品目別に下位分割されるという入念さ。しかも各クラスには多国籍の専門家からなる審査委員会が設置され、等級別にメダル受賞者の氏名が講評付きで記録されているのです。多くの「商品」は価格表示で展示され、いやが上にも生産者の競争意識は煽られました。ヴァルター・ベンヤミンが言うように、まさしく19世紀における万博会場はかつての大聖堂に代わり「商品」という物神を崇拜するための巡礼地となっていたのです[参考文献6]。

次に紹介するのはF.デュカン編になる1867年の第2回パリ万博(fig.3&4)の絵入り報告書[参考文献2&3](fig.6)で、会期中60回に分けて予約定期配本された分冊を30冊ずつ2巻にまとめ製本したものです。随所に配された大判挿絵は精緻に彫られた木口木版で細部の鑑賞にも堪え、とくに第1冊冒頭に折り畳んで収められたシャン・ド・マルスを会場とした大パノラマ図は圧巻。

最後は同じ1867年のパリ万博に際し、おもに地方や外国から物見遊山にやって来た旅行者向けに編まれたハンディーなパリガイドブック[参考文献4](fig.7)。この書の特徴は、パリの歴史や万博案内とともに、1867年当時のパリ及び近郊の名所旧跡の解説ほか、鉄道路線図、美術館や劇場の見取り図、ホテル、レストランなどのお役立ち情報が満載されている点で、さながら後のミシュランガイドを先取りしたような新趣向は注目に値します。

人々はパリ万博に気晴らしを求め、第二帝政はこれをうまく利用しました。
(国際文化学部 国際文化学科 教授)



fig. 1 1855年第1回パリ万国博覧会のメイン会場風景。右から長方形の産業宮、円形のロンド、セーム川に沿ったアネックス。現在グラン・パレやプティ・パレが建っているあたりが中心部。手前はコンコルド広場。[参考文献8, p.16]



fig. 2 1855年第1回パリ万国博覧会のメイン会場となった産業宮。手前の並木大通りはまた馬車が走るシャン・ゼリゼ。彼方にはセーム県知事オスマンと建築家イトゥルブによって周辺整備の始まった凱旋門が見える。[参考文献9, p.56]



fig. 3 1867年第2回パリ万国博覧会のメイン会場となったシャン・ド・マルスの楕円形の建物。サン=シモン主義を空間的に実現、同心円状に回ると同一ジャンルの製品を、放射線状に歩くと同一国のすべての製品を見ることができる。[参考文献8, p.18]



fig. 4 1867年第2回パリ万国博覧会のメイン会場の回りはイギリス風庭園が造られ、中にカフェ、水族館、温室、浴室、ジオラマなど各種行楽施設のほか、労働者のためのモデルハウスなども配され賑わった。[参考文献7, p.34]



fig. 5 「1855年パリ万国博覧会 国際合同審査委員会報告書」表紙 [参考文献1]



fig. 6 F. デュカン編「1867年パリ万国博覧会 図説 第1巻」表紙 [参考文献2]

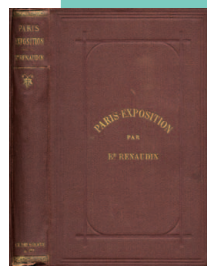


fig. 7 E. ルノーダン編「1867年パリ万国博覧会 ガイドブック」表紙 [参考文献4]

<参考文献>

- 1) *Exposition universelle de 1855: Rapports du Jury mixte international/publiés sous la direction de S.A.I. le Prince Napoléon*, Paris, Imprimerie impériale, 1856, 1574pp., 267x203mm. [開架 606/9/20] 2) Ducuing, François, et al. *L'Exposition universelle de 1867: illustrée. t.1*, Paris, Commission impériale, 1867, 480pp., 374x271mm. [開架 606/9/1B-1B][復刻版: 開架 606/9/1B-1] 3) Ducuing, François, et al. *L'Exposition universelle de 1867: illustrée. t.2*, Paris, Commission impériale, 1867, 480pp., 375x272mm. [開架 606/9/1B-2B][復刻版: 開架 606/9/1B-2] 4) Renaudin, Edmond. *Paris-Exposition, ou, Guide à Paris en 1867: histoire, monuments, musées, théâtres, curiosités, vie pratique, avec la description du Palais du Champ de Mars, et des environs de Paris, orné de cartes, plans et gravures*, Paris, Charles Delagrave & Cie, [1867], 420pp., 180x125mm. [2012年度教育IP購入図書 図書館所蔵予定] 5) 鹿島茂「絶景、パリ万国博覧会: サン=シモン主義の夢」河出書房新社, 1992. [開架4階 606/9/4] 6) ベンヤミン, ヴァルター: 今村仁司他訳, 「バサーージュ論」(全5冊) 岩波書店, 1993-1995. [開架4階 944/B35/1-1~1-5] 7) Ageorges, Sylvain. *Sur les traces des expositions universelles: Paris, 1855-1937 à la recherche des pavillons et des monuments oubliés*, Paris, Parigramme, 2006. [開架4階 606/9/8] 8) Ory, Pascal et al. *Paris et ses expositions universelles: architectures, architectures, 1855-1937* [exposition, La Conciergerie, 12 décembre 2008-12 mars 2009], Paris, Edition du patrimoine, 2008. 9) Fiori, Ruth et Gilles. *Paris déplacé: du XVIIIe siècle à nos jours: architectures, fontaines, statues, décors*, Paris, Parigramme, 2011.



新入生にイチ押しの1冊



『Dead poets society: a novel』

N.H.Kleinbaum著
Hyperion 1989年
(開架4階 933/K14/1)
学長
神学部 神学科 教授 G.W.パークレー



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これからの4年間、実りある学生生活を送られるように願っています。

さて、皆さんはこれから授業等で、高校時代より、多くの本を読まなければならないと思います。教科書だけではなく、皆さんに色々な分野から「本を読む楽しみ」を覚えていただきたいのです。読書は気分転換やリフレッシュするために役に立ちます。

そこで、“Dead Poets Society”を紹介させていただきます。この本は「いまを生きる」という映画の脚本を基に書かれた本で、私が通った私立男子校で起こった事件に基づいて、私が中学3年生の時の国語(もちろん英語ですね)の先生が書いたものです。私がどのような中学・高校生活を送ったか、ご自分の英語能力をアップするために楽しんで読んで頂きたいと思います。

『きみたちと現代』

宮田光雄著
岩波書店 2002年
(開架2階 159/5/1B)
学生部長
商学部 商学科 教授 福浦 幾巳



私たちの人生は限られています。その限られているかけがえのない“人生を豊かにする”ために、人はどのように生きたらよいのでしょうか。そのためには、各自が自分の生きることの“使命”、その“生きることの意味の大切さ”を日々の生活を通して見出すことではないでしょうか。それも若いときに見出すことができればそれに越したことはないようにおもいます。その点で本書は、現代に生きる君たち若者に対して、“人生を豊かにする”ための必要性を正面から真摯に問いかけている好個の良書といえます。是非、入学の節目に本書を読んでいただきたいとおもいます。少なくとも、それは今後の“人生を豊かにする”貴重な“指針”を私たちに与えてくれることでしょう。

『マルセルの夏』(DVD)

イヴ・ロベール監督
1990年 フランス作品
(開架1階(視聴覚) 778/DVD/MAR)
文学部 外国語学科 フランス語専攻4年 園田 桜子



大学生活に慣れてきたら、授業の空き時間などを映画鑑賞に使うみてはいかがだろうか? 映画は文化の詰め合わせ、人生を豊かにするエッセンスがたくさんあります。紹介するフランス映画「マルセルの夏」はフランスで知らない人はいない、仏作家マルセル・パニョルの少年時代を映画化した作品です。大人になったマルセルの解説が進行するストーリーは、子供の純粋さ故の葛藤や感動、失望、喜びといった気持ちをよみがえらせ、見ている方も少年マルセル目線で壮大な自然や大人たちの様子を感じることができます。かつて誰もが子供の頃に経験したことのある何気ない日常を、軽やかな音楽と共にさっと見ることが出来る映画です。

特にフランスに関心のある人には、当時の南フランスの社会を考えることができ、学校教育、狩猟文化、フランス人のバカンスへの情熱などフランス文化を知る資料としてお薦めの作品です。19世紀末の南仏ののどかな美しい自然を背景に愛情を込めて描かれたこの映画は、自分の人生でいつか『生涯で最も美しい日々』になるのかを考えさせてくれます。

『苦海浄土』

石牟礼道子著
河出書房新社 2011年
(開架4階 908/0/64-28)
法学部 法律学科 3年 岡 麻美



水俣病の名前は、誰もが一度は聞いたことがあるのではないだろうか。本書は、その水俣病について取り扱った、全三部からなるルポルタージュ作品である。第一部では、患者たちの言葉が聞き書きによって記されている。とは言え、全ての言葉が実際に話されたものであるというわけではない。著者である石牟礼さんの創作によるものが大半だ。しかしながら、そこに記されている患者たちの悲痛な訴え、そして、憤りやかな生活の中に突如として現れた公害の恐怖は、紛れも無い事実である。

最近では、訴訟問題関連でしばしば名前が挙がる水俣病だが、本書を通してこの問題についてももう一度考えてみてはどうだろうか。

『図書館愛書家の楽園』

アルベルト・マンゲル著 野中邦子訳
白水社 2008年
(開架2階 010/2/14)

法学部 国際関係法学科 4年 内田 義久



江戸川乱歩の所有する膨大な書物がつまった蔵<幻影城>を小学生の頃に写真でみて以来、豊かな蔵書をもつことに憧れてきました。小遣いをやりくりしながら本を買っていた子ども時代。そしてアルバイトをしてようやく高いものを買えるようになり、たまっていった本たち。<幻影城>に比べて遥かに見劣りしますが、本のおかげで足の踏み場がない自室にいと不思議に充実した気分となります。

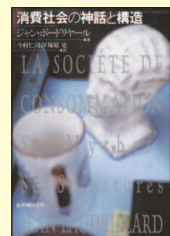
このように書物に囲まれていたいという欲を持った人たちは世界のいたるところに。

紹介する本のlibraryとは「図書館だけでなく、書斎や書庫など、複数の本が集まった状態、場所」を指します。なぜ人は書物を蒐集したがるのかという問いからはじまる本書は、公共の図書館のみならず、個人の蔵書、収容所の図書室はたまた架空の書物にまで話題が及び、幾多にも寄り道をしながらめく世界を描き出していきます。

語られる図書の知識には刺激的で圧巻ですが、同時に著者の本に対する愛情は読み手である私たちをライブラリーへと誘ってくれるはずです。

『消費社会の神話と構造』

ジャン・ボードリヤール著
紀伊國屋書店 1995年 普及版
(開架3階 331/7/23-2)
文学部 英文学科 3年 笠 優弥



モノは消費社会においては使用価値ではなく他者との差異を表す「記号」として現れる。『消費社会の神話と構造』の概説をするところになる。言い換えるならば、現代世界においてモノは本来の使用目的として以上に付加価値が重要となるということだ。そのいい例がブランド品だろう。最近だと不必要な機能がついたスマホや家電を連想してもいいかもしれない。ボードリヤールはこのような消費は他者との差異を求めるためだとしたうえで、差異を求めるのは個人ではなく、システムそのものだと考えた。そしてこの差異を生み出す「記号」はモノだけでなく人との関係や教養、暴力といった問題にも当てはまるという。40年以上前の著作にも関わらず、その鋭い理論に今の時代を分析したかのような錯覚を抱いてしまうほど新鮮だ。

世界の図書館

[アメリカ編]



ローズンフェルド図書館

(アンダーソン・スクール・オブ・マネジメント/
カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校)

Rosenfeld Library (Anderson School of Management / UCLA)
110 Westwood Plaza Los Angeles, CA 90095, United States
<http://www.anderson.ucla.edu/rosenfeld-library>

商学部 経営学科 准教授 鄭 義哲

UCLAはビバリーヒルズやハリウッド、サンタモニカビーチにも近いLA西部のウェストウッドにある。University of Californiaの9つのキャンパスのうちのひとつで、1919年に開校され、1927年に現在の名称であるUCLA (University of California at Los Angeles) になった。総面積は160万㎡で、170もの校舎があり、2012年(秋)は学部5,621名が入学してきた。そのうち約20%を世界からの留学生が占めており、また新入生の94%が寮生活を送っている (Profile of Admitted Freshmen Fall 2012 [1])。

UCLAの図書館は、10の図書館と、また個別の学部が所有している資料室(例: Asian American Studies Center Reading RoomのLibrary [2])から構成されており、蔵書数は9,748,501冊を誇っている (UCLA library 2010-11 progress reportより)。

内容としては学部学生をサポートする図書館と、より専門性を持ったフィールドに特化した専門図書館に分けられる。州立大学であるUCLAの図書館への出入りは誰でもできるようになっており、情報へのアクセスも制限がかかっていないものであれば、誰でも閲覧することができる。

今日紹介するRosenfeld LibraryはAnderson school of Management (Andersonは設立資金を提供した人)に付属している専門図書館である。Anderson school of Managementはビジネススクール(MBA)として有名で、世界各国の会社から派遣されてきた社会人学生達が出会い、学び、刺激を与え合う場となっている。

Rosenfeldは図書館建立資金の一部を出したUCLAの卒業生

の名で、Rosenfeld LibraryはUCLA Anderson School of Managementをサポートする図書館として全米でも10位に入るアカデミック・ビジネス図書館の一つである。経営、戦略、会計、マーケティング、ファイナンス、情報システムなどのようなビジネス関連分野にわたる情報を提供するAnderson Schoolの情報のパートナーと位置付けられている。

図書館の3階の入口から入るとすぐ左側には昔のNew York証券取引所のトレーディング・フロアーに置かれていたトレーディング・ポストが置かれている。1929年から1932年まで設置されていたポストの一つで、その馬蹄のような形からhorseshoeポストという名前がついているそうだ(写真3)。さすが、ビジネス専門図書館という感じを受ける。

図書館の中には、グループで議論や勉強もできるスタディー・ルームがある。ガラス張りになっていて外から中が見える構造になっており、閲覧室にいる学生からもルームで熱い議論を戦わせている様子がいつでも見られる。基本的にスタディー・ルームは各階に設置されているが、静かに本を読む1階の閲覧室以外は、ルームの上が空いており、外まで議論する声が聞こえてくる。図書館全体として、一人で静かに本を広げて学ぶ場所というより、仲間が集まって熱く議論をする場所という印象を受けた。

参照サイト

[1] http://www.admissions.ucla.edu/Prospect/Adm_fr/Frosh_Prof12.htm/

[2] <http://www.aasc.ucla.edu/library/>



[写真1] ローズンフェルド図書館



[写真2] ローズンフェルド読書室



[写真3] horseshoeポスト

文学部 英文学科 教授 田部井 孝次

2010年、スタンフォード大学図書館長が来日し、東京で図書館蔵書デジタル化について講演を行なった。いずれライブラリアンではなく、サイブラリアン(サイバーとライブラリアンを組み合わせた造語)が未来の図書館を支えるようになるだろうと語ったのだが(「WEBマガジン[KAZE]風」参照)、周知のとおり、これはもう実用化されている。例えば、スタンフォードの20を超える図書館のうち、工学図書館、物理学図書館では、いち早くデジタル化が進み、「本のない図書館」へと生まれ変わった。さすがシリコンバレーにある大学だけはある。大学近郊には、アップル、グーグル、インテル、ヤフー、パッカードなどの企業が散在し、産学協同のモデルともなっている。そのためか、図書館を含め、大学内には利用出来るコンピューター室があちこちに置かれ、利便性は抜群だ。特にマイヤー図書館は1週間土日関係なく24時間利用可能で、コンピューティング・サービスが充実しており、よく利用させてもらった。

今回紹介したいのは、大学で最大規模を誇るグリーン図書館である。2006年在外研究でスタンフォードに行ったときは、図書館カウンターでIDを発行してもらい、あとはすべての図書館を自由に利用出来た。すべて、と言っても、実際利用したのはグリーン、マイヤー、フーパー、SALと呼ばれる附属図書館の4つくらいだが、特にほぼ毎日利用していたグリーンなどは、入口にいる図書館員とも顔なじみとなり、ほとんど顔パスで入館できた(今はIDカードをスワイプさせないと入れない)。この気安さは、ただ大学関係者だからというわけではなく、1993年在外でカリフォルニア大学パークレー校に行ったときも、グリーン図書館でビジター用のIDをいとも簡単に発行してもらい、居心地のよさに惹かれて足繁く通った。学生数は6,000人台、大学院生を含めても15,000人にも満たない。隣のパークレーが3万を優に超える数だから、少数精鋭が集う大学というイメージを持たれがちだが、「自由の風が吹く」

(Die Luft der Freiheit weht.)という大学のモットーが示すとおり、キャンパス内(実際は、世界屈指の広大な敷地からファームと呼ばれている)には自由の気風が満ち溢れている。まさに「よく遊び、よく学べ」そのままだ。

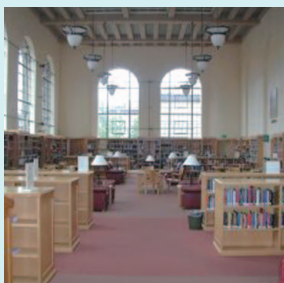
図書館は、期末試験前ともなるとにわかに学生が増え、ピリピリした雰囲気になるが、普段は、図書館が多く、そのうえ大きいこともあり、わりと閑散としており、気に入った階の机でゆったりと研究できた。お気に入りの机は、北側奥にある3階、フーパータワーが目の前にそびえる所、または東側奥のシリコンバレーが一望できる個人用机であった。書架に囲まれた閑静な場所だ。その時の研究テーマは、「マーク・トウェインとネイティヴ・アメリカン」であったが、資料には事欠かず(全900万冊中300万はグリーンにある)、グリーンになれば、となりのフーパータワー1階の図書館、希少本が収まっている附属図書館に直接行くかネットで取り寄せれば、翌日には手に入る。至れり尽くせりのサービスだ。残念ながらキャレルは提供されなかったが、試験時さえ避ければ、独り占めできるような空間があり、研究上何の支障も感じなかった。

開館は、基本的に朝8時から夜中の1時まで(金、土は午後10時閉館)。ただ、月曜日だけは午後6時閉館なので、うっかり勘違いし、閉館を知らせる館内アナウンスを聞き逃しでもしたらとんでもないことになる。こういううっかりは結構な回数あったが、今はそれもいい思い出だ。

グリーン図書館もブックレスの時代には逆らえないのかもしれないが(すでに電子書籍が大学全体で150万はあるというから驚きだ)、文学・文化を研究する者にとっては、やはり本の重みと匂いは捨てが

たい。年間10万冊を超える紙媒体の書籍を購入していることから、いよいよスペース確保も問題となり、グリーン図書館にもデジタル化の波はヒタヒタと押し寄せている。

写真提供(1,2,4):Courtesy of Karim Arsalane, Stanford University Libraries



[写真1 グリーン図書館読書室]



[写真2 グリーン図書館読書室]



[写真3 フーパータワーよりマイヤー図書館を臨む]



[写真4 グリーン図書館西ポータル(奥に見えるのがフーパータワー)]

ハーバード大学やMIT、タフツ大学、ボストン・カレッジなど数多くの素晴らしい大学があるボストン。その中で、私が在外研究で滞在したボストン大学 (Boston University) のキャンパスは、チャールズ川沿いにあり、川の反対側にはMITを眺めることができます。コモンウェルス・アベニューという大通りをはさんで大学の建物が集まる東西に細長いキャンパスです。広いキャンパスという印象はないのですが、東西の長さはといえば、路面電車の駅数で9駅分、歩くと30分以上はかかった記憶があります。

図書館や図書室は、最も大きく220万冊の蔵書を有するMugar Memorial Libraryのほか、専門分野毎に大小18に分かれています。私は在外研究中、ロー・スクールの客員研究員でしたので、Mugar Memorial Libraryと、ロースクール棟の1階～3階にあるPappas Law Libraryを利用していました。このPappas Law Libraryだけでも68万冊を所蔵しているようです。このような記事を書くのであれば、足しげく図書館に通っていればよかったのですが、資料のデータベース化が進んでいるアメリカでは、私の研究に必要な文献のほとんどはデータベースで入手できました。実は講義を聴講するほかはPappas Law Libraryの上、ロー・スクール棟の9階にある客員研究員用の部屋にこもっており、図書館に行く理由は、多くの場合は、ちょっとした息抜き。どんな本があるかなとふらふらしていました(もちろん、必要に迫られていくこともありましたが)。

客員研究員期間の初めにPappas Law Libraryで簡単な利用説明を受けた際に驚いたのは司書の方の専門性の高さです。様々なデータベースの利用説明のほか、専門的なニュースが電子メールで配信されるサービスに登録してもらいました。そのメールサービスは、とても専門分化していて私の専門である会社法に関する内容も細かく分かれています。司書の方は、私の問題関心を聞くと、その中から、素早く適切にいくつかのトピックを選択し、さらに、関連するトピックを提示してくれました。その適切な選択は法学への深い理解がなければ不可能です。毎日4つほどのニュースメールを受け取ることができ、最新情報をつかむこと

に役立ちました。また、設備で感心したのは、資料の複写のためにコピー機だけでなく、大きなスキャナーが設置されていたことです。スキャナーに関しては無料で利用が可能でした。確かに必ずしも印刷する必要がない資料も少なくないですから合理的でした。



[写真1 Mugar Memorial library外観]



[写真2 学生が歓談できるホール]



[写真3 3階のPCコーナー]

最も大きな図書館であるMugar Memorial Libraryはロー・スクール棟の隣に位置しています。入り口を入ると一部2階まで吹き抜けの空間には、ガラスケースの中に書籍等が展示してあるほか、多くのPCが設置されています(数えたことはありませんが100台近いのではないのでしょうか)。そこでは学生が割と自由にPCを利用しているようでした。Mugar Memorial LibraryもPappas Law Libraryも多くの机と椅子が設置されていて、それらのほとんどは、学生が勉強するために使っています。昼にちょっとだけ本を読もうなんて気分が入館しても、空いた机はまず見つかりません。長い時間滞在するためか、Mugar Memorial Libraryには閲覧室に隣接して学生が歓談できるホールもありました。よく言われるように米国の大学ではそれだけの予習時間が必要不可欠で、そのための環境を大学も準備しているといえるでしょう。開館時間にもそれは現れていて、Mugar Memorial Libraryは学期中、月曜日から木曜日までは朝7時から深夜2時まで、金曜日は夜が11時まで、土曜日は朝8時から夜11時まで、そして日曜日は朝こそ10時からですが、夜は再び深夜2時まで開いているのです。学生にとって、日曜の午後はもはや予習をするための時間なのですね(チャペルがある大学ですが、安息日は?という疑問はないわけではありませんが...)。私が親しくなったロー・スクールの留学生(といっても、日本の弁護士さんですが)も、日曜日は図書館にこもって予習に励んでいました。

帰国して1年半以上たちましたが図書館のことを思い返すと、まず頭に浮かぶのは頑張っている学生の様子です。本学の図書館のスタッフも設備も(スキャナーはなさそうですが)、データベースも学ぼうとする学生の需要に十分こたえるものだと思います。かの地の学生に後れを取らず私も学生さんも頑張っていかなければと思わずにはいられません。

図書館利用説明会

図書情報課 小川ゆきえ

図書館では、本や雑誌などの資料の検索方法、探し方、データベースの使い方などをご紹介します「図書館利用説明会」を開催しています。今回は主に「初級編」の内容をご紹介します。

初級編

毎年前期に、主に新生を対象に実施しています。西南の学生として、最低限マスターしておいてほしい図書館利用法を図書館職員が説明します。各学部の基礎演習等のクラス単位で実施していますので、自分のクラスがこの説明会に参加するかどうかは、授業をご担当の先生へお尋ねください。

内容：

- ① 講習：本の借り方、返し方、本の探し方、データベースについてなど、大学図書館でできることをスライド画面を使って説明します。
- ② 検索演習：図書館の本を探す基本ツールであるOPAC（オーパック）や、基本的なデータベースの使い方を説明します。SAINSルームで実際にパソコンで検索し、練習問題にも取り組んでいただきます。
- ③ 館内ツアー：OPACで検索した本を実際に棚から取り出す練習として、本探しクイズに挑戦していただきます。その他、館内各所の紹介や、学部生は普段入ることができない閉架（書庫）エリアのご案内します。

利用説明会で使用するスライド画面です。

実際に使っている練習問題です。

関連データは図書館ホームページから見ることができます。

[図書館ホームページ](#)

[学習・研究支援](#)

[各種資料](#)

閉架（書庫）にも
本がたくさんあります。



中・上級・
テーマ別編

初級編の他に、中級編、上級編、
テーマ別編の利用説明会も実施し
ています。

講義計画の都合等で、授業の一環で図書館利用説明会に参加できない方は、個別に実施することもできますので、下記担当まで事前にご連絡ください。
担当者と日程調整や内容の確認をした後に、説明会を実施します。

担当：参考・資料係 (E-Mail: lib-srv@seinan-gu.ac.jp)

『資生堂 (コレクション・モダン都市文化17)』

和田博文編 ゆまに書房 2006 [開架2階 213/6/48-17]



【図1】資生堂の包装紙(1924年制作)。写真はモノクロだが、現物は中央のアルファベットの社名が緑、その他は赤で、とても鮮やかなデザインになっている。



【図2】PR誌『資生堂グラフ』(1933年)掲載の写真。ドイツのパウハウスでモホイ＝ナジが駆使したフォト・モンタージュの技法が生かされている。



【図3】PR誌『資生堂グラフ』(1935年)より。写真の横には詩人・川路柳虹の「權を手にして」が掲載されている。

邂逅はモダニズムを考えるとときのキーワードの一つである。近代社会においては、一見すると無関係に思われる要素と要素が、突然出会って結びつき、既存の思考を揺るがす過剰な「何か」が、次々に生成しているからだ。

この図書館報の表紙を見てほしい。「或る日のデイトリツヒ」と題された約80年前(1933年)の絵葉書を選んだ。写真では少しわかりにくい¹が、現物をみるとハリウッド女優マレーネ・ディートリッヒが日本の雑誌『婦人画報』を手にし、「資生堂クリーム白粉」の広告がみえる構図になっている。当時はもちろんアメリカ行きの旅客航空機など存在しない。最新の汽船(氷川丸)でも横浜-シアトル間に約2週間を要した。この絵葉書はクリーム白粉の宣伝記念として配布されたものだが、太平洋に横たわる空間性と時間性を一気に飛び越え、資生堂とハリウッド女優の突然の出会いを生み出したのである。今回紹介する『資生堂』は、こうした歴史的にも貴重な資料や書籍、雑誌記事などが復刻、集成された書物である。

資生堂は、明治5(1872)年に福原有信が薬局として創業したが、重要な役割を果たしたのは後継者の福原信三である。コロンビア大学卒業後、ニューヨークやパリで経験をつんだ信三は、第一次世界大戦直前の1913年に帰国した。注目に値するのは、信三の関心が、化粧品を中心としながら、多様な文化領域へ開かれていた点である。商品デザインのために欧州の尖端モードを吸収しただけでなく【図1】、写真家でもあった信三は美術や写真の展覧会を開催し【図2】、さらにPR雑誌『資生堂グラフ』には、多くの文化人が流行に関する記事を発表していくことになる【図3】。

こうして、デザイナーの山名文夫、画家の小村雪岱、工芸家

の富本憲吉、詩人の堀口大学や西條八十、歌人の与謝野晶子、小説家の菊池寛や吉川英治、建築家の堀口捨己などの複数の文化人が集い、多彩な言説が邂逅しながら、資生堂は「文化創造の装置」として日本のモダニズムを先導していくのである^(*)。

さらに見逃せないのは、資生堂の活動が同時代の社会と密接にリンクしていたことだ。そもそもファッションは孤立した領域ではなく、様々な思想や政治性を映し出すメディアとしての側面をもつ。女性の断髪が、第一次大戦に従軍したヨーロッパの女性たちの髪型であり、それが大戦後に普及し始めることなども、よく知られる事実だろう。実際、第二次世界大戦が開戦した後の資生堂PR雑誌でも、例えば横山隆一の漫画「ヨーロッパ直輸入戦乱モード」などが掲載されていくのである。

こうした文脈の中に、最初に紹介した絵葉書を再配置してみたい。あの絵葉書が作られたのは1933年、つまりヒトラーがドイツ首相に就任し、ナチスが政権を獲得した年である。その後ヒトラーは、国威発揚のためにベルリン生まれの女優ディートリッヒを利用しようと考えたが、彼女はその誘いを断り、第二次大戦中は戦場へおもむいて連合国軍の兵士を慰問するなど、反ナチスの活動を行うことになるだろう。ディートリッヒの細い眉は当時の日本でも一つの流行として消費されることになるが、それと同時に、先の絵葉書は、故国ドイツとアメリカとの間で引き裂かれていく彼女の、1933年という象徴的な年の一瞬を切り取っていたのである。

*: 詳細は和田博文(著)『資生堂という文化装置1872-1945』(岩波書店、2011年) [開架2階 576/7/10A]を参照。

編集後記

新学期です。何か新しいことを始めてみませんか? 図書館にあるシリーズものを読破する! というのはいかがでしょうか。この号の「蔵書ギャラリー」で紹介された本は「モダン都市文化」というシリーズのうちの1冊です。テーマは他に、音楽、恋愛、カフェ、ファッションなど様々。装丁のデザインが特徴的で(右の写真参照)、図書館2階の本棚を眺めるとすぐに見つかります。全100巻。4年間で読めるでしょうか? (Y.O)



西南学院大学図書館報 No.174

2013(平成25)年4月30日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<http://www.seinan-gu.ac.jp/library/>